

一 明和六己丑之八月つちのととしより九月迄より 彗星見ユまで 夜半に東方より出星に

つれて西江行 後程夜明ケニ至り おそく出けるが ほうきのさきハ
後々程長くなびけたり 光りハ薄き夜も有 光り甚しき時もあり 老人
達の咄はなしにも前々見たりしが今度のやうなるハあらしとの説也
自江戸来りし狂句えどより

天文ハ不知考見るに繪えにかける

屁への如し 天下太平武運長久てんかたいへいぶぶうんちようきゆう

君か代は 艸木もなひく 放屁星ほうひぼし

一 庚寅かのえとら (明和七年) 五月朔日曆文二日ついたち 日食皆既いわく 依之人皆申され

けるハ 往昔御国替之節 日食皆既つクと云フ 御家中多クハ越中

越後成ル海辺にて右之三月 蝕しよくとも不覚一天乍チニ闇夜と成り

道中炬火 提灯かがりびなど持て路をさくり 家々には行燈あんどんともして食物を

認む 勿論見馴レざりし波打際白浪 洗々濛濛せんせんもうもうとして おそれをなし

ける咄したくしよりして今年もあらかじめ其覚悟をよと近隣申通じて

各支度嚴重にして他行をも止められ御用の御普請ふしん其外御勘定所も

其刻限ニハ退出して庭の面ニハ水向ケ抔なごして空を仰ぎ今か〜と

待居けるに 東三方まちおり方雲氣起りければ扱さてそと子供など家々に呼集

めける 暫くありて其儘晴々たる蒼天となれり 誰れをか怨ミン

天を怨みつべふもなけれ共 天に偽りありやとも いひ笑ひける

其後 江戸より到来の狂哥有 扱さてハ高陽斗りの事ニもあらず

(皆既?)

いみな月といふ八名こしの事なるにあら食もなやうそのつい立
い式分三分渋川殿(天文方の事)の無算用節句前とてかけの沙汰なし

い十分にかゝる事そとおもひしに巳午不見(みんま)に食ハつい立にけり

一 寅の文月ふみづき(七月) 廿七日夜半 一天にじゅうしち 忽たちまちニあかき事火のことし

空火事と号す 人皆驚き寝たるを起し立て いか様大變あらんと
見る処に八ツ時頃方うすらひて何乃事なし 稲田橋の上より

其初めを見たるもの乃咄しに 初め佐渡山の方に当りて大なる月の
出るがごとくまたハ大火かとする中ニ火袋の口より吹出せるやう
にて たちまち一天に光の満て草木人影もはきと移ル斗り也 海よ
り出たりと事 海火事共唱へける

我等 此節 信州野沢村へ入湯ニ参り居て湯草臥くたびれに下寝入りする處
何となく騒さわがしくからず?ゲ敷柄子来 しば鳴り 火事かくと呼声に裏の山に上り
見るに高田の方一面に赤しこハ火事と高田町家方至りし者共身拵みこしら
へして立帰る者多し

我ハたゝこそと二ノ息おちつついて落点キたり たとへ終夜 空を飛ブ共
十里余りの山道踏指斗も損也と 山を徐々と下り 予ハ廿二ニして
天命を智ルとぞ儀りける 翌朝 咄しを聞きに北海方火の玉上り空
をこがしけるか 天の色ハ雲ニよりて日光の移りにて大小ハ存事
とそ承る